

翻 訳

戴 裔 煊 著

『宋代鈔鹽制度研究』(2)

安 蘓 幹 夫

第二編 鈔鹽制度之橫的研究

第一章 交引

一 交引積義

二 交引与宋代其他信用貨幣性質之差別

三 交引之淵源 以上「広島經濟大学經濟研究論集」第16卷 第2号

四 交引之種類

(1)鹽交引 (2)茶交引 (3)見錢交引 (4)香藥犀象等交引 (5)礬引

(6)其他

第二章 鹽鈔

一 鹽鈔積義

二 鹽鈔之內容板式与鈔紙

甲 鹽鈔無遺存之原因及其內容之推測

(1)鹽鈔支塩以後即塗抹繳銷 (2)繳銷之鹽鈔由太府寺点对焚毀

以上本号

乙 鹽鈔之板式及鈔紙

三 鹽鈔價格

甲 解鹽鈔價

乙 東南鹽鈔價

(1)鈔法推行前之東南鹽鈔及鈔價 (2)鈔法推行後之東南鹽鈔價

丙 福建鹽鈔價

丁 広南鹽鈔價

四 鹽鈔之措置印刷交易機關

甲 太府寺

(1)太府寺之職掌与元豐改制前後之塩務行政 (2)太府寺之組織

乙 交引庫

丙 權貨務

(1)權貨務建置沿革 (2)權貨務之官吏 (3)權貨務收入增虧之比較与賞罰

丁 其他外路出売塩鈔機關

(1)北宋陝西之折博務与売鈔場 (2)南宋兩広之売鈔庫

戊 交引鋪

(1)交引鋪之所在地 (2)交引鋪之任務

第三章 鈔塩制度下之提舉茶塩司

一 提舉茶塩司之職掌及其沿革

二 提舉茶塩司之人事機構

三 提舉茶塩与塩課增虧之考較制度

四 提舉茶塩官姓名拾零

(1)北宋提舉塩事官表 (2)南宋提舉塩事官表

第三編 鈔塩制度之縱的研究

第一章 交引塩制

一 入中折中与交引塩制積義

二 入中之嚆矢与利用茶塩折博之倡議者

三 解塩之通商与折博

(1)宋初解塩東西南三区之通商制度 (2)陝西州軍入中之優潤則例及紐算願塩方法

四 東南塩之通商与折博

五 川塩河東塩閩広塩之折博

(1)川塩 (2)河東塩 (3)閩広塩

六 折中倉与塩之折博

(1)折中倉建置之倡議者及其建置年代 (2)折中倉之規制及入中支塩則例

第二章 引鈔塩制產生存在与時代需要

一 入中制度之来由

二 折中制度之来由

三 引鈔塩制產生之歴史因素

第三章 范祥鈔塩制

一 范祥鈔塩制產生之条件

二 范祥及其鈔塩制

(1)范祥之略歴 (2)范祥鈔塩制

- 三 范祥鈔鹽制推行之阻力及其推行之效果
- 四 范祥鈔鹽制成功條件之分析
- 第四章 鈔鹽制之變遷與頹壞
 - 一 薛向對於解鹽之措置
 - (1)罷州縣征收塩課 (2)減沿邊八州軍鬻塩價 (3)改善畦夫待遇減少畦夫數額 (4)作小鈔壳解塩 (5)即永興軍置壳塩場
 - 二 熙豐間鈔法之頹壞
 - (1)熙寧末鈔法頹壞之概況 (2)熙寧十年之改革 (3)改鈔以後之狀況
 - 三 哲宗時鈔法之概況
 - (1)確定解塩鈔歲額為二百万緡 (2)陝西沿邊八州軍鬻塩復范祥旧制
 - 四 鈔鹽制變遷與頹壞之剖析
- 第五章 鈔鹽制及其功能之轉變
 - 一 鈔鹽制功能轉變之外觀
 - 二 鈔鹽制轉變之因素
 - 三 崇寧初措置鈔法之講義司
 - 四 崇寧大觀之鈔鹽制
 - (1)蔡京改鈔法之嚆矢 (2)買鈔所之設置與換鈔法 (3)崇寧大觀間之貼納對帶循環法 (4)蔡京崇寧間對於鈔法之其他措置 (5)大觀末之改革
 - 五 政和宣和間之鈔鹽制
 - 六 鈔鹽制屢變之效果與影響
- 第六章 南宋鈔鹽制度之推廣
 - 一 南宋國用與鈔鹽制關係之概觀
 - (1)南宋國用匱乏之一斑 (2)鈔鹽制對於南宋財政上所負之任務
 - 二 淮浙鈔鹽制之紛更
 - (1)淮浙塩鈔法之屢更 (2)倉場支塩制度之罷復 (3)淮浙塩之加饒
 - 三 閩塩鈔制之推行及其罷止
 - (1)福建鈔鹽制與鈔塩錢 (2)鈔法再行於福建及其罷止原因之剖析
 - 四 兩廣客鈔官般之起仆
 - (1)兩廣塩官壳通商之經過 (2)兩廣客鈔官般屢罷屢復理由之探討
 - 五 趙開蜀塩引制
 - (1)趙開及其引塩法 (2)趙開引法之功效及其流弊
- 第七章 結論
 - 一 鈔鹽制與官般官壳制對於宋代財政上所負任務之比較觀
 - 二 鈔鹽制之發展與時代需要之關係
 - 三 從鈔鹽制研究所得之制度觀

なお翻訳するにあたっては、今回も沙鄭軍君（本学大学院前期課程二年在学中、蘇州大学歴史系助理研究員）が素訳を試み、訳者が推敲し論考を構成した後に討論を行う方法をとった。この場を借りて御協力戴いた沙君に感謝申し上げたい。

四 交引の種類

宋代の引鈔券の応用範囲は広く、種類もまた多い。その性質について言えば、「交子」「銭引」「会子」などのように見銭に代わって一種の信用証券となり、一つのシステムとして社会上に流通しているものを除いて、その他は一種の証明書（憑證）として、あるいは手形（支票）の性質に属するものが沢山あって、いちいち枚挙することは出来ない。文字の上から見れば、「券」或いは「要券」、或いは「引」、或いは「鈔」と称され、一様ではないがこれで足りる。

いわゆる「交引」は、一つの普通名詞となっており、これを詳しく分類すれば種々色々ある。ここに分別して述べれば以下のようなになる。

(1) 塩交引

『宋会要』食貨36 榷易景德2年（1005）12月監榷貨務供備庫副使安守忠等の言によれば、

「解塩元許客人従本務入金銀絲（一作綿）帛博買交引、就兩池請塩、於南路唐・鄧等十二州軍通商地分貨売。自因河北闕錢銀糧草、…許客人只就彼入中、實文抄赴京翻換省帖、下本務支給解塩。又因陝西許客人（煇案…「人」応作「入」）中糧草、取客從便、算射茶塩交引。算射解塩者亦従本務翻換、支給交引、赴兩池請塩、並於南路破貨。……至景德元年（1004）十月、再准勅、三司衆官定奪。其唐・鄧等十二州軍南塩、依西監（煇案…「監」疑「塩」之誤）等第餉例、許客於逐州軍入納見錢鈔銀實価糧草、直廩（「廩」疑「発」之誤）交引赴解州榷塩院請領、更不入京翻換……」

とある。

この文を見て分かることは以下のことである。商人で京師榷貨務に金銀などをもって博買する者にしろ、或いは沿辺州軍に入中してから文抄を持

って京師に赴き、省帖に轉換して榷貨務の下したところの塩を算射する者にしろ、又或いは沿辺に錢銀糧草を納入してから交引を直接に渡された者にしろ、それらには関係なくその交引はただ請塩の場合でのみに使用は限定され、ともに塩交引となしたわけである。

(2) 茶交引

茶交引の性質は、塩交引と同じである。『宋会要』食貨36榷易景德3年(1006)7月22日の条に、

「国朝自乾興二年置榷茶務⁽³⁹⁾，諸州民有茶，除折稅錢外，官悉市之，許民於東京輸金銀錢帛，官給券就榷務以茶償之。後以西北用兵又募商人入粟麥材木於辺郡。給文券謂之交引。許就沿江榷務自請射茶。」

とある。

これによれば、京師に錢帛を納入し、或いは辺郡に粟麥材木を納入してから榷務で請茶できる券を渡され、そういう券はみな茶交引となしたわけである。

ただ上文には宋代の茶の生産及びその貿易に関しては、まだ説明がないので、それらを概括して叙述する必要があるようである。宋李燾が彼の著した『続資治通鑑長編』100天聖元年(1023)にそれに関して述べたところがあり、その梗概はすこぶる的を射ている。

「国朝惟川峽・広南茶聽民自買売，禁其出境，余悉榷，犯者有刑。在淮南則蘄・黄・廬・舒・寿・光六州，官自為場，置吏總之。謂之「山場」者十三，六州採茶之民皆隸焉。謂之「園戸」，歲課作茶輸其租，余官悉市之。其售於官，皆先受錢而後入茶，謂之「本錢」。又有百姓歲輸稅者亦折為茶，謂之「折茶」，總為稅課八百六十五万余斤。其出鬻皆就本場。在江南則宣・歙・江・池・饒

(39) 煇案・『宋会要』食貨36景德3年7月20日条言「国朝自乾興二年置榷茶務」一語，「興」字為「德」字之誤，乾德為宋太祖年号，乾興為宋真宗年号，乾興盡元年，無二年。乾興元年壬戌(1022)翌年癸亥(1023)為仁宗天聖元年，則乾興之「興」字有誤。考『玉海』181乾德榷貨務条「乾德二年(964)八月辛酉置榷貨務京師及建安・漢陽・蕲口並置(原註・「開宝二年(969)七月丁亥，移建安務於揚州，給券就建安請領，茶貨交引始此。…」)」又『宋会要』食貨36「太祖乾德二年八月詔京師・建安・漢陽・蕲口並置榷場」則榷場亦即榷貨務，乾興為乾德之誤，甚為明顯。

・信・洪・撫・筠・袁十州，広徳・興国・臨江・建昌・南康五軍，兩浙則杭・蘇・明・越・婺・処・溫・台・湖・常・衢・睦十二州，荆湖則荆・潭・澧・鼎・鄂・岳・綿・峽八州，荆門軍，福建則建・劍二州，巖如山場輪徂折稅，余則官悉市而斂之。總為歲課江南千二十七万余斤，兩浙百二十七万九千余斤，荆湖二百四十七万余斤，福建三十九万二千余斤，皆輻輪要會之地。曰江陵府，曰真州，曰海州，曰漢陽軍，曰無為軍，曰蘄州蘄口，為樞貨務。凡民欲茶者，皆售其官。其以給日用者謂之食茶，出境則給券，商賈之欲買易者，入錢若金帛京師樞貨務，以射六務十三場茶，給券隨所射与之，謂之交引。願就東南入錢若金帛者聽，入金帛者，計直予茶如京師。」

宋代の茶の生産と貿易の情形に関しては、李燾の言ったものが甚だ明晰をなしている。彼は入中に対しては茶を以って償っていると言い、また述及するところがある。

「然自西北宿兵既多，饋餉不足，因募商人入中芻粟，度地里遠近，增其虛估，給券以茶償之。後又益以東南繒錢，香葉象齒，謂之三說，而塞下急於兵食，欲廣儲峙，不受（煇案『宋史』183食貨志茶，「受」作「愛」）虛估，入中者以虛錢得實利，人競趨焉。」

およそこの種々の券は、ともに茶交引である。宋代の茶貨の貿易制度は屢々変更があるが、本文とは関係がないので省略する。本篇の目的は、宋代の茶の生産及び貿易上の一般的な情形について略述するものである。もっとも、茶交引とは如何なるものか、ということをはっきりさせることのみでもある。茶引の法は後でもまた変更があるので、ここでは更に後で述べることにする。

宋の徽宗崇寧4年（1105）に、蔡京は茶法を改めて官設の茶場を置くのをやめ、商人には所在の州県或は京師で長短引を与えることとした⁽⁴⁰⁾。ここにおいて茶引にはまた「長引」、「短引」の目があることが分かる。「長引」の名を考証すると、宋の神宗熙寧7年（1074）より始まる。当時の規定は、商人で川茶を興販するために秦鳳路に入って貨売する者は、茶を産出した州県に令して長引を出させる。指定はただ熙・秦州と通遠軍及び永寧寨の

(40) 見『宋史』184食貨志茶。煇案『宋会要』食貨30茶法雜錄政和2年8月26日尚書省措置茶事第七項「客販茶並茶務請長短二引，各指定所詣州県住売，長引許往他路，短引止於本路興販」，其分別如此。

茶場において販売して官に入れるを許すとするものであった。⁽⁴¹⁾蔡京はその法にしたがった。「政和初(1111), 蔡京欲盡籠天下錢糶中都, 乃創引法, 即汴京置都茶場, 印売茶引, 許商人赴官算請, 就園戸市茶, 赴所在合同場秤發, 歲收錢四百余万緡, 建炎渡江, 不改其法。」⁽⁴²⁾制度は宋初と違うが, 宋の世の終わりまでもやはり茶引と称した。

蔡京は引法を始めたあと, すべての長短引は太府寺から厚紙でもって式を立てて印造して, 当職官の名字を書押し, 合同簿を置いて籍をしるしておわる。そして300道ごとに籍をあわせて都茶場務へ送り,⁽⁴³⁾都茶場務をへて商人に給与する。この種の茶引の形状, 内容は如何に, そういうことを記録した本は現存せず, 書畝があり, いまだ詳考することは出来ない。

(3) 見錢交引

宋代において沿辺で入中制度を実施した初めの頃には, 見錢交引の名称はまだない。しかしながらその当時, 沿辺で斛斗を入中してから交引を持って京師の榷貨務へ赴き見錢を請領できるもの, みなこれを見錢交引と言った。また, 即ち便錢と同じであることは, 前文においてすでに言及した。宋の仁宗天聖3年11月に翰林侍講學士刑部侍郎孫奭などが, 河北の沿辺州軍寨の便糶糧草法を変更した。すなわち商人が糧草を納入してから香茶見錢三色交引を渡す。⁽⁴⁴⁾従ってここに香茶と相對して初めて見錢交引の名が見

(41) 『宋会要』食貨30茶法雜錄上「熙寧八年二月三日都大提舉熙河路買馬司奏…據提舉熙河路市易司狀申, 准都大提舉買馬司劄子, 坐准熙寧七年七月十六日中書劄子內聖旨指揮施行, 內一項節文…客人興販川茶入秦鳳等路貨売者, 並令出產州縣, 出給長引, 指定只得於熙秦州通遠軍及永寧寨茶場中売入官」。觀此則茶長引不自蔡京改茶法始可知。

(42) 見宋李心伝『建炎以來朝野雜記』甲集14總論東南茶法條。

又按『玉海』181嘉祐弛茶禁條注亦云, 「政和以來, 不置場, 不定價, 茶商買引, 就園戸交易, 依引內之數, 赴合同場秤發, 至今不易, 公私便之」。

(43) 見『宋会要』食貨30茶法雜錄政和2年8月26日尚書省措置茶事第九項。

(44) 見注29。又『山堂考索後集』57茶塩類引『編年』「天聖三年十一月己酉, 罷貼射茶法, 今河北沿辺(煇案…「辺」原文作「存」誤, 今據『宋会要』食貨39改正)入中粮草, 而給以見錢・香・茶三色交引(「引」原作「勾」, 據『宋会要』改正)。

えた。

（4）香薬犀象などの取引

香薬犀象などの物品は、もともと中国の産物ではなく、どうして博易されたのか。考えるに、宋の太祖開宝4年（971）より「嶺南平後，交趾歳入貢，通関市，並海商人遂浮舶販易外国物。闍婆・三仏齊・渤泥・占城諸国，亦歳至朝貢，由是犀・象香薬珍異，充溢府庫。」⁽⁴⁵⁾とある。これは香薬犀象などの物品の由来である。

宋代には南蕃諸国の物貨を航舶して来た者に対して，それらの市易の事宜は市舶司を設置して管理させた。初めは広州に市舶司を置き，のちにはまた杭州にも置いた。淳化中に明州の定海県に移したが，かえって不便であったので再び杭州に復した。咸平中に杭州・明州に命じて各々司を設置して，蕃商の都合の良いように市易することを許した。元祐2年（1087）⁽⁴⁶⁾にも市舶司を泉州に，3年（1088）には密州に設置し，⁽⁴⁷⁾その外にもまだ多くの市舶務が設置された。

この種の対外貿易は国益があるので，蕃商と一般の人々との自由売買は禁止されている。ここにおいていろいろな蕃貨が，例えば犀象香薬などは国内産の茶塩礬鉄などと同じ取扱いで国家の専売品となり，禁榷制度を実施した。『宋史』268張遜伝によれば「遜請於京置榷易署，⁽⁴⁸⁾稍増其価，聽商

⁽⁴⁵⁾ 此據『宋史』268張遜伝，案『宋会要』食貨55榷貨務条「太平興國中，以先平嶺南及交趾，海南諸国連歳入貢，通関市，商人歳乘舶販易外国物，自三仏齊・渤泥・占城犀象香薬珍異之物，充溢府庫」文与『宋史』張遜伝大致相同。

⁽⁴⁶⁾ 見『宋会要』職官44市舶司総叙。

⁽⁴⁷⁾ 同前書職官44「哲宗元祐二年十月六日詔泉州增置市舶」。又「三年三月十八日密州板橋置市舶司」。又『宋史』186食貨志亦同。

⁽⁴⁸⁾ 張遜伝之「榷易署」，『宋会要』食貨55榷貨務総叙謂「始議於京師置香薬易院」，而『宋会要』職官44則謂「太平興国初，京師置榷易院」，又據食貨55大中祥符2年2月詔，其名応為「香薬榷易院」，止言「榷易院」蓋其省称。

又按『宋会要』食貨55香薬榷易院於「大中祥符二年（1009）二月榷併入榷貨務」，又大中祥符二年二月詔香薬榷易院自今併入榷貨務勾当」，而日人藤田豊八在其所著『宋代市舶司及市舶条例』謂「徴之於南宋，市舶所重要之禁榷貨物乳香，亦於

（次頁につづく）

人入金帛市之，恣其販鬻，歲可獲錢五十萬緡，以濟經費。」とある。宋の太宗は彼の請を許可し，遜を香藥庫使に任じた。

禁榷された蕃貨に対しては、『宋会要』職官44，太平興国初年の詔・「諸蕃国香藥宝貨至広州・交趾・泉州・兩浙，非出於官庫者，不得私相市易。又詔民間藥石之具，恐或致闕，自今惟珠貝・瑇瑁・犀牙・寶鉄・鼈皮・珊瑚・瑪瑙・乳香禁榷外，他藥官市之余，聽市貨与民。」とある。官が禁榷としたものは8種だけで，のちに紫硃一種を加え，あわせて9種である。⁽⁴⁹⁾しかしまだその時々々の需要によって一定してはいない。

榷貨務出売，故知舶貨之専売，亦於榷貨務行之」。藤田氏據『宋史』185食貨志香条之文，雖所言無誤，然藤田氏固常引『宋会要』之文者，忽略此条，不知榷易院併入榷貨務之由来，未免失考。

(49) 『宋会要』職官44太平興国7年閏12月詔「聞在京及諸州府人民或少藥物食用，今以下項香藥，止禁榷広南・漳・泉等州船舶，上不得侵越州府界，紊乱条法，如違，依条断遣，其在京并諸處，即依旧官場出売，及許人興販，凡禁榷物八種・，瑇瑁・牙・犀・寶鉄・鼈皮・珊瑚・瑪瑙・乳香。放行藥物三十七種・木香・檳榔・石脂・硫黄・大腹・龍腦・沉香・檀香・丁香・丁香皮・桂・胡椒・阿魏・蒔蘿・幕澄茄・訶子・破故紙・荳蔻花・白荳蔻・鵬沙・紫硃・胡蘆芭・蘆会・華撓・益智子・海桐皮・縮砂・高良薑・草荳蔻・桂心苗・沒藥・煎香・安息香・黄熟香・烏橘・木降真香・琥珀・後紫硃亦禁榷」。觀此，則宋代所禁榷之蕃貨為何物，可以明瞭。

煊案・蕃貨名色甚多，而禁榷者亦不止此。宋室南渡以後，「蕃商販到乳香一色，及牛皮筋角堪造軍器之物，自当盡行博買」云云。此与其他蕃貨種種名色，俱見『宋会要』職官44紹興3年12月17日戸部言，可以参考。

又案・南宋趙彥衛『雲麓漫鈔』卷5「福建市舶司常到諸国船舶，大食・嘉令・麻辣・新条・甘杞・三仏齐国，則有真珠・象牙・犀角・腦子・乳香・沉香・煎香・珊瑚・琉璃・瑪瑙・玳瑁・龜筒・梔子香・薔薇水・龍涎等，真臘亦名真里富・三泊・綠洋・登流眉・西棚・羅斛・蒲甘国則有金顔香等。渤泥国則有腦板，闍婆国多藥物，占城・日麗・木力千・賓達儂・胡麻巴洞・新洲国則有夾煎。仏羅安・朋豐・達羅啼・達磨国則有木香。波斯蘭・摩逸・三嶼・蒲里喚・白浦邇国則有吉貝布貝紗。高麗国則有人參・銀・銅・水銀・綾布等物。大抵諸国產香略同，以上船舶，候南風則回，惟高麗北風方向。凡乳香有揀者・餅香・搗香・墨搗水濕・墨搗纏末。如上諸国，多不見史伝，惟市舶司有之」。觀趙彥衛所記，則蕃国方物，約略可以明瞭，特附注於此以見梗概。

官の禁榷の蓄貨については、香薬榷易院が最初に京師で「出売香薬場」⁽⁵⁰⁾として設置され、出売したものは大体香薬犀牙が主であった。大中祥符2年2月に香薬榷易院は、榷貨務に併入された。

香薬庫に貯蔵された香薬犀象は、既に多い。しかし一方では沿辺での羅買は、銅銭を急ぎ必要としている。ここにおいて、この種の蓄貨を用いて沿辺の支遣に応酬することを考えた。しかし、ただ在京での出売だけではないこととした。『宋会要』食貨36榷易真宗景德2年（1005）3月24日の三司の言によれば、

「請令河北轉運司，有輸藥入官者，准便羅麥例，給八分錢，二分象牙香薬，其広信・安肅・北平粟麥，悉以香薬博羅，時辺城頗乏兵食，有司請下轉運司經度之，帝曰「戎人出境，民初復業，若責成外計，不免役兵飛輓，何以堪之。」因命祠部郎中樂和乘駅与轉運使同為規画，還，奏請以香薬博買，遂從其議，出内帑香薬二十万貫，往彼供給。」

とある。

いわゆる香薬をもって博買すること，即ち香薬で見銭に代えること，これを博買という。香薬をもって見銭に代替することが出来ないとしても，品搭分数をもって少しく見銭を払うことが出来る。品搭分数の法を考証すると，咸平5年（1002）に三司使王嗣宗が創始した三分法から始められた。すなわち河北の沿辺入中の斛斗は，その値（代価）を償還するのに，十分を率となして四分は香薬を給し，三分は犀象，三分は茶引となしたものである。6年（1003）に改めて六分は香薬犀象，四分は茶引とした⁽⁵¹⁾。乾興元年（1022）にまた改めて茶引三分，東南見銭二分半，香薬四分半を支払うこととし，一定した比率はない。⁽⁵²⁾このような分数でもって施行される下で，

(50) 『宋会要』食貨36榷易太平興国2年3月「監在京出売香薬場大理寺丞染冲，著作佐郎陶邠」則置場出売可知。

(51) 見沈括『夢溪筆談』12，又『玉海』181景祐茶法条。

(52) 按品搭分数，後來亦有改变，如『宋会要』食貨39市糴糧草天聖6年10月条云…「雄・霸・莫・順安・保定・信安等六州軍，昨経水災去處，抛定便糴收糴斛斗，三分中，校減二分，却於近裏沿御河天雄軍等處便糴收糴，其添饒支還則例，欲依乾興元年九月勅施行。二十五千支向南閑慢州軍見錢，三（煇案「三」下下有「十」字）十千支茶交引，四十五千取客穩便，筭射香薬象牙」，並可參考『夢溪筆談』12。

入中してから榷貨務に持って行き香藥犀象を算請する取引を、香藥犀象取引という。いわゆる香・茶・見錢三色取引である。『宋会要』食貨36天聖以後の記述には、屢々見られる。その中のいわゆる香引は、すなわちこれである。南渡以後は、抽買到香、品搭成套、召人算請などの語があるが、引法がどうなったのか、詳細は分からない。

(5) 礬引

宋代には白礬・緑礬に対しても官によって禁榷され、人々の自由売買を許さなかった。礬の産出地に官は礬場を設置してこれを収買し、礬が値上がりをした時にこれを出売した。人民の私販者があれば、斤数の等第に依って断罪するのに差があった。⁽⁵³⁾「白礬出晋・慈・坊州無為軍・及汾州之靈石県…、緑礬出慈・隰州及池州之銅陵県。」⁽⁵⁴⁾

礬の売買に関して、記載にあらわれたもので最も早いものは、宋の太祖建隆2年(961)に劉熙古に命じて晋州の礬を制置させ、商人が金・銀・布帛・絲・綿・茶及び緡銭を納入するのを許し、官は礬をもって与えることとした。宋の太宗の端拱年間には、商人がただ金・銀・見錢のみを入博するのを許した。⁽⁵⁵⁾

『宋史』185食貨志によれば、天聖6年(1028)に商人に令して芻粟を麟州に入中して河東礬を算請させた。虚估が高すぎるので官には利益がない。嘉祐6年(1061)には芻粟を納入させることをやめ、緡銭を再び納入させた。礬は140斤をもって一駄となし、錢を京師榷貨務に入れる者は

(53) 『宋会要』食貨34礬場開宝3年2月詔、太平興国2年12月詔、俱言載販私礬条例、可以参考、文冗長、無大關係、從略。又『宋史』185食貨志礬「建隆中詔、商人私販幽州礬、官司嚴捕没入之。繼定私販河東・幽州礬、私鬻礬三斤及盜官礬至十斤者棄市。開宝三年增私販至十斤、私鬻及盜滿五十斤者死、余罪論有差。太平興国初、以歲鬻不充、迺詔私販化外礬一兩以上及私鬻至十斤、並如律論決、再犯者悉配流、還復犯者死」其文大致与『宋会要』同、較簡要、姑錄之以備參考。

(54) 見『宋史』185食貨志礬、按『宋会要』食貨34礬場、言置場務處、白礬有晋州・無為軍・無慈・坊・汾州、緑礬有隰州・池州・信州鉛山場、韶州泮水場・無為軍崑山場・淮南等、無慈州、而信州以下諸地又為『宋史』所無、互有詳略。

(55) 俱見『宋史』185食貨志礬。

107,000文とし、麟・府に入れる者は3,000文を減じる。この種の入粟或は入銭してからの算請制度は、茶塩の算請制度と同じであり、『宋史』食貨志の中で明言されたことはないが、必ず入納算請の要券—取引はある。『宋会要』食貨39市糴糧草天聖7年（1029）11月3日の三司の言によれば、

「西京管界、今年大熟、欲許客旅於彼處入納諸色斛料、依市価每十貫七百文令取便指射、自京東・京西及向南州軍見錢、如願要香・茶・及顆末塩、白礬等取引、並聽從之。」

とある。

これが白礬取引を指摘していることは明らかであり、例証となる。初めは、熙豊年間に東南九路で官が自ら礬を売り、発運司によって統轄・管理されていた。元祐の初めに通商を許可したので、礬引の法は崇寧・大観の時期の茶塩引の法と大体似ている。元祐8年2月2日の戸部の言によれば、

「無為軍岷山白礬元条禁、官自出売、昨權許通商、每百斤收税五十文。準元祐勅、禁礬給引、指住賞（「賞」疑「売」之誤）處納税、沿路稅務、止得引後批到発月日、更不收税。其無為軍岷山礬、欲依禁礬通商条例、從之。」

とある。

この種の礬引は、礬取引から転化してきており、茶塩引の情形とよく似ている。礬の運売には各々路分があり、「河東・河北所産礬、係通入京畿・京西・京東・陝西六路、無為軍礬・係通入江・淮・荆・浙・広・福九路。」⁽⁵⁶⁾とある。大観2年（1108）に河東・河北・淮南等礬を産する路分では、各々提挙官を置き、⁽⁵⁷⁾通商路分は則ち転運司一名、各々兼ねて提挙を行う。商人は權貨務へ見銭を納入して公據を支給され、礬場に出向いて礬を算請することが許された。⁽⁵⁸⁾この種の公據は、その性質がまた取引と同じである。「政和五年（1115）、河北・河東緑礬、聽客販於東南九路、民間見用者、依通商地籍之、聽買新引帶売、大率循倣塩法、」⁽⁵⁹⁾とある。すなわち

⁽⁵⁶⁾ 見『宋会要』食貨34礬場、徽宗大観2年3月25日尚書省言。『建炎以来朝野雜記』甲集14礬則謂「国朝旧制、晋・相礬行於河東京畿、淮南礬行於東南九路」。

⁽⁵⁷⁾ 見同前。又『宋史』185食貨志亦根據『宋会要』之文亦謂「河東河北淮南各置提挙官」。

⁽⁵⁸⁾ 見同前。

⁽⁵⁹⁾ 『宋史』185食貨志。

茶塩の対帶法と似ている。

南渡以後も、やはり引制を実施している。その法は、「自榷貨務給引赴場，許客人算請，每百斤為一大引，輸引錢十二千，頭子市利僱人工墨錢二百七十六，又許增二十斤勿算以優之。五十斤為中引，三十斤為小引，引錢及加貨以是為差」。⁽⁶⁰⁾とある。すなわち礬引はまた大・中・小の分類がある。

南宋の礬貨の算請については、その制度は茶塩鈔引法と相同じであり、商人が礬貨を算請するには、錢を榷貨務に納める。毎引納めるべき礬価を除く外に、やはり茶塩鈔引の例により毎貫頭子市例錢二十文，顧人錢一文を納め，毎引工墨錢二十文を納めて，それから榷貨務は引を支給し，商人は引を持って礬場へ行って照会してから請礬する。その引は，礬場で月日を批鑿して商人に渡され，礬の照会に従って貨売する。⁽⁶¹⁾

礬引にも合同号簿があり，茶塩鈔引と異なるところがない。この種の礬引及び合同号簿も太府寺交引庫より印造してから榷貨務に送り，榷貨務より合同号簿を持って官を派遣し，礬場へ送って収管する。商人が引を持って礬場に来れば，勘対して誤りがなければ礬と取り換える。⁽⁶²⁾

宋代の礬引について，その考見できるものは大体以上である。本文の重点点とするところは，宋代の沿辺の入中，或は榷務に金銀錢帛を納入してか

(60) 『建炎以來朝野雜記』甲集14礬條，但據『宋會要』食貨34紹興8年6月4日條「淮西運判李仲孺言，契勘本路無為軍崑山場入納金銀算請鈔引，般販指州縣貨売，每引納錢一十二貫，販正礬一百斤，并加饒二十斤，共一百二十斤，……其礬堆積累年，支發遲細，蓋緣客販本重利薄，如販至所指地頭，每斤止売到錢二百文，豁出買引官錢一百文外，息錢不多，是致販者稀少，即今官売引錢，每斤除元買礬本外，有淨利八十余文，措置欲量減引錢，招誘發泄。詔…見売見斤價上，量減二十文，每斤作一百文，一引一十二貫，共量減錢二貫文，每人作一十貫文，召人算請」。觀此，則礬引之價，後又有減損。

(61) 『宋會要』食貨34紹興11年12月4日條工部據榷貨務條具事項「一，契勘自来客人赴務算請礬貨，係依茶塩鈔引例，每貫納頭子市例錢二十文，每貫納顧人錢一文，每引納工墨錢二十文，……一，契勘客人納錢赴榷貨務算請礬貨係給鈔引付客人執前去礬場照令請礬，其引係礬場批鑿月日付客人隨礬照會貨売」。

(62) 同前條榷貨務條具事項「合行預降合同号簿，欲令太府寺交引庫，速行印造，差本務号簿官押發前去信州鉛山場収管勘同支礬」。

ら算請するときに、見銭に代替する種々貨物の証券である。この種の証券をもって一つの体系に組み入れ、分別して説明し、そしてそれらの間の関係と転化をはっきりと示し、及びそれらの国家財政上の役割を究明することを目的とした。茶・香・礬の貿易の条例及び種々の規定、香の打套のようなもの、茶礬の籠節法等に至ってはすべて省略している。

(6) その他

この外に、宋代のいわゆる「引」「券」というものは、その目が甚だ多く枚挙することがなかなか難しい。茶塩引とよく似ているものには、「鉄引」がある。「鉄引」は、宋徽宗の重和元年（1118）に始まり、諸路の鉄は茶塩法をまねて榷売され、鑪冶を置いて鉄を収め、引を給して人を募集して市場に流通させた⁽⁶³⁾。ただ入中制度と関係がないので、前述の項の種類の内には入れていない。

その他船舶の運輸に使用され、毎綱の官物の数目の証明書（憑単）となすものは、すなわち宋太祖の時に発行された綱運引がある⁽⁶⁴⁾。蕃船が港に至って、税務を経て貨物を抽買したあと、支給した証明書（憑證）もまた引と称する。商人は抽解を買ったあと下して、外州に行って貨売することを欲すれば、市舶司に対して公憑引目を請わなければならない⁽⁶⁵⁾。船舶で海外へ販売貿易をするものも、官に引券の発給を請わなければならない。そうでないとその貨物は没収される⁽⁶⁶⁾。

宋代の荆湖南路には、また麴引というものがある。民に吉凶の事の集会があれば納錢買引を許し、近隣の酒戸に寄って酒麴をつくる。これを「麴

(63) 見『宋史』185食貨志阮冶。

(64) 『宋会要』食貨42漕運開宝3年9月詔「（上略）自今四川等處，每綱具官物數目，給引付主史，沿路驗訖，如有引外之物，悉沒官」是引之用於綱運者。

(65) 俱見『宋会要』職官44市舶司熙寧7年正月一日詔。

(66) 『宋史』186食貨志互市舶法「雍熙中（中略）商人出海外蕃國販易者，令並詣兩浙司市舶司，請給官券，違者沒入其寶貨」。又「元豐二年買入高麗寶及五千緡者，明州籍其名歲，責保給引發船，無引者如盜販法」。此外元祐二年條，崇寧元年條俱言給引券之事，不便一一具舉。

引」という。⁽⁶⁷⁾

また宋室南渡以後、金人の支配区域からの輸入品と本国からの輸出品に対して、やはり北宋の互市方法にならって榷場を置き、それによって両方の貿易を統制し、南商北商が直接に授受することが出来ないようにした。紹興12年(1142)に淮東盱眙榷場を置き、その他淮西・京西・陝西にも榷場を置いた。⁽⁶⁸⁾当時淮東盱眙の榷場に一種の証明書(憑證)があって、「関引」と称し、南商は場で北貨を博買され、この関引を持ってすなわち便利の良い所に向向いて貨売する。⁽⁶⁹⁾いわゆる関引は貨運憑单のようなものであり、北宋の「関子」及び「公據」の類とその性質は同じらしい。⁽⁷⁰⁾

(67) 見『宋会要』食貨20酒麴雜錄政和元年4月4日条「戸部奏、臣僚上言鄂州漢陽軍諸県売麴引、並不俟入戸有吉凶聚会情願請買、多係違法抑配、大収価銭、侵漁搔擾」・其他2年4月6日条、8年11月8日条亦俱載麴引事。

又『宋史』437劉清之伝、亦載清之請蠲減衡州麴引銭事。考『朝野雜記』甲集15麴引銭条謂「有劉獬者、知衡陽県、始令人戸請買麴引、以助月椿、自是旁郡邑皆效之。」則麴引之創始者為劉獬、然李心伝似謂紹興間始有麴引、據『宋会要』酒麴雜錄所載、北宋末已有之、不俟南渡後矣。

(68) 『宋史』186食貨志互市舶法紹興「十二年盱眙軍置榷場官監、与北商博易、淮西京西陝西榷場亦加之。」「宋史」此文甚簡、『宋会要』食貨38和市高宗紹興12年5月4日「戸部言、近承指揮、於盱眙建置榷場、博易買南北物貨、為和議已定、恐南北客人私自交易、引惹生事。今条具下項……・淮西・京西・令逐路総領銭糧官司、陝西令川陝宣撫司都転運司共同相度議定置場去處。……」当時榷場以淮東最重要因先置。

(69) 『宋会要』食貨38和市紹興12年12月20日条「戸部言、主管淮東盱眙榷場曹泳劄子・客人於本場博買到北貨、從本場出給関引、從便前去貨売、仍免半稅、其經由稅務、既收稅後、更不契勘有無本場関引、及関引内同与不同、即便放行。措置欲將本場関引、從提領司印給排立字号、付本場置歴消破、旬(「旬」疑「勾」字之誤)支破数目、客人姓名物貨名件、申提領司照会点検。倘或本場開具不同、及於関引内影帶数目、許經由稅務徑申提領司根究、將本場官吏重賜行遣。如或經由州県稅務点検得有客旅將帶北貨無本場関引及関引内数目不同、不即根究、縱容放行、致有透漏、其稅務官吏乞依透漏私茶塩法科罪、仍却許本場覺察、庶幾有以関防、從之」。則此種関引亦為一種運貨憑證。

(70) 蘇東坡『奏議集』卷2論河北京東盜賊狀「欲乞特勅兩路応販塩小客、截自三百(次頁へつづく)」

宋代において券と称されるものは、すなわち宋初には江南への通市を禁止し、商人が江を渡ることは出来ず、ただ沿江の人々及び煎塩亭戸は勝手に樵漁をなし、製造した屨席の類は榷署（即ち榷貨務）から券を与えられてから、渡江して販売貿易することが出来た。⁽⁷¹⁾この種の券は、一種の特許証みたいなものである。

北宋の哲宗の時に川陝で馬を買う場合には、ある一種のいわゆる馬券というものがあり、券でもって馬を取得する。蕃漢商人で馬を売ったものは、券を持って銭を受取ることが出来る。⁽⁷²⁾すなわちこの種の馬券は、また小切手（支票）の性質に属する。

以上述べたところを総合してみると、宋代にはいわゆる引鈔券は種々色々、ひとつひとつ数えきれないほどあることが分かった。その性質で重要なことは、やはり二種にほかならない。一種は小切手の性質を持ち、価値あるものと兌換できるものである。他の一種は許可証の性質を持ち、売買の合法を証明し、政府から許可されたものである。本篇は引鈔の説明に偏重するが、名が近く実が異なるものもやはりみな取り上げて、宋の時代の票據の概況を見たものとしたい。

斤以下、並与榷免取税、仍官給印本空頭関子、与灶戸及長引大客、令上曆破使逐旋書填月日、姓名、斤兩与小客、限十日更不行用。如敢借名為人影帶分減塩貨、許諸人陳告、重立賞罰。所謂「空頭」、当即未曾書填者之謂、関子与関引似為一物。

又『宋会要』食貨36榷易天聖元年2月条「今客旅於在京榷貨務入納見錢十千、共籌請二十千香棗象牙、取便於在京或外處州軍販売、仍仰榷貨務出給公據交付、及一面関牒商稅院、候客人將出外面破貨、即據数收納稅錢、出給公引放行」、所謂「公據」「公引」、似亦為一種憑單。

(71) 見『宋史』186食貨志互市舶法。

(72) 『宋史』332陸師閔伝「師閔遂請令蕃漢商人、願持馬受券者、於熙秦兩路印驗価給之。」又『宋史』374趙開伝「嘉祐以銀絹博馬、価皆有定、今長吏旁緣為姦、不時帰貨、以空券給夷人、使待資次、夷人怨恨、必生刃患、為害二」。

第二章 塩 鈔

一 塩鈔の解釈

塩鈔の名はいつからあるのか、塩鈔と塩交引はどのような区別があるのか、どのような関係があるのか、ここにまずこれらの問題について討論したい。北宋の典籍、例えば司馬光の『涑水紀聞』、張舜民の『画墁録』、沈括の『夢溪筆談』等の書物によれば、すべて鈔法は范祥から始まったと言っているが、范祥が塩鈔を始めたということは明言していない。しかしながら塩鈔の名は、実に范祥が塩鈔法を始めてから発生した。明丘濬の『大学衍義補』28山沢の利上に、

「陝西河東鹽塩、旧法官自般運、置務拘壳、兵部員外郎范祥、始為鈔法、令商人就邈郡入錢、售鈔請塩、任其私壳、得錢以實塞下。臣謹按…塩鈔之名始此。」

とある。

范祥が、塩鈔法を始めたということには疑義はない。塩鈔の名は、范祥の鈔法から発生したこともはっきりと分かった。ただなぜ塩鈔と称されたのか、解釈をしなければ分からない。宋李燾の『續資治通鑑長編』165仁宗の慶歴8年(1030)10月丁亥の条の言によれば、屯田員外郎范祥は提点陝西路刑獄と制置解塩を兼ねる。並邈の九州軍で芻粟を入中することをやめ、実錢を入れさせて要券を支給する。塩の生産地で券を検驗し、数によって塩を出す。となっている。『宋史』181食貨志上に記載された内容もこれと同じである。すなわち范祥が鈔法をはじめてつくって支給した塩鈔は、もともと「券」或は「要券」と称され、雍熙以後の芻粟を入中してから支給された「交引」は、「券」或は「要券」と称されたものと正に相同じである。最初は実に「塩鈔」の名はない。しかしそれをもって塩鈔と称するのは、実に塩鈔が代わりに実錢を表わしているからなのである。范祥の改法以後、並邈には芻粟を入れなくて実錢を入れるので、実錢を入れて取得した塩貨と換請できる券は、前の芻粟を入れて取得した請塩の券と比較す

るとこの差異がある。従って官文書(案牘)上にこれを塩鈔と称した。実はすなわち交引はまた交鈔と称された。例えば『宋会要』食貨36榷易大中祥符7年2月の三司の言に、「陝西入中糧斛。交抄併多, 富民折其価直。」とあり、張方平の『楽全集』24論国計には「在京支還交抄」, 『統資治通鑑長編』220神宗熙寧4年正月条吳充の語に「立法之初許商人入芻粟辺郡執交鈔至京師」, 『宋会要』食貨30茶法雜錄上の神宗熙寧4年正月13日の条に記載されたこの文は、「鈔」が「抄」になっている。「抄」と「鈔」とは互いに通用している。「交引」は「交抄」或は「交鈔」と称され、およそこれらはみな確かな証拠になっている。ただ「交鈔」は一般の交引の通称であり、塩鈔は塩の専用である。時間的な順序から言えば、先に塩交引がありのちに塩鈔がある。塩鈔は、塩交引の転化した結果とすることが出来る。実際の性質から言えば、塩鈔と塩交引とは全く異なるところがない。章如愚の『山堂群書考索後集』57茶塩類に、

「交引即塩鈔, 但隨時命名不同耳。」

とある。

章如愚は南宋の人である。彼の編纂した『山堂群書考索』前後集は、雄大で大きな見方をしており、しかも彼自身は学問が広く博学であると称号され、当代の情形を目撃して、しかも当代の材料を根拠としているので、彼の言ったことには誤りがない。

二 塩鈔の内容、形式と鈔紙

甲 塩鈔が遺存されていない原因及びその内容の推測

塩鈔の形状、内容は如何に、かつて宋の時代の官私の重要な選述資料を廣泛に考証したが、全然見つからない。しかも当時の塩鈔は、現在まですでに遺存していない。存在していても贗品しかない。塩鈔が遺存されていない原因については、いくつかの糸口がある。

(1) 塩鈔は塩を支給した後、すぐに塗り消して返納させて取り消す。『宋会要』食貨26紹興元年10月19日戸部尚書孟庾の言によれば、

「乞今後兩浙路令塩場將支抹訖塩鈔，限当日繳申主管司，本司類聚，候押号簿官到彼，即時交付押回。

詔…主管司不預行類聚交付，及号簿官不盡數交付押者各杖一百。」

とある。

これをみると、塩鈔は塩を支給して以後、倉場から全部主管司に引き渡す。主管司によって塩鈔は分類してから集められ、それから号簿官に渡して書き判をして返され、これでもって悪だくみをするのを防ぐ。こうすることは、旧鈔が塩を支給して塗り消したあとで、もし全部を返納させて取り消しをしなければ、旧鈔を利用して改易し、そして再び重ねて塩を支給することがあるかも知れないことを恐れるからである。孟庾のこの請をみると、当時には既にきつとこの類の悪だくみをするのが発生していたのであろう。陸游の『老学庵筆記』巻4の所載によれば、宋徽宗の大観中に顔巽は、塩鈔の文字を塗り消して書き改めて偽物を作ったことによっていれずみの刑に処せられ、化州に流れたことがあり、これによって悪だくみの発生を明証することが出来る。塩鈔は全部が返納されて取り消されたので、民間ではおのずと遺存しないのは当然のことである。

(2) 返納して取り消された塩鈔は、太府寺によって点検され焼却される。『宋会要』食貨28嘉定5年2月24日の詔によれば、

「遇有換到旧鈔，仰各處先照已給新鈔字号，於旧鈔批鑿，仍抹訖類聚發赴太府寺点対焚毀施行。」

とある。

これはすなわち、押号簿官から書き判をされ押し回された、すでに塩を支給された旧鈔である。この旧鈔は、太府寺に送赴されて数字を点検されたあとで、全部焼却された。塩鈔の遺存の無いことは、この両者がその重

(1) 陸游『老学庵筆記』巻4云「東坡守杭，法外刺配顔巽父子，御史論為不法，累章不已。蘇公雖放罪，而顔巽者，竟以朝旨放自便，自是豪猾益甚，以藥塗塩鈔而用，既駁抹，賂主者浸洗之，藥盡去（此據涵芬樓本，毛本無「去」字，）而鈔不復（毛本「復」作「傷」，似以「傷」字為正），雖老於其事者不能辨，……大観中胡突修為提舉塩事，會計已毀抹塩鈔，得其姦，奏之，黥竄化州，籍没貲産，一方称快」。可知塗改塩鈔作偽事，未嘗無有。

要な原因をなした。一般の商人は錢でもって鈔を買い、もともとは塩を支給されることを欲するが、既にして市場で流通することが出来ずして塩が支給されなければ、すなわち廃紙となる。もし特殊な情況がなければ、絶対に鈔を残しておくことは出来ない。すでに塩を支給された鈔は全部焼却され、また民間には存留されていないので、このような理由で塩鈔を今日見ることが出来ないわけである。

この故に基づいて、宋の時代の塩鈔の形状と内容は如何に、現存していないので分からないわけである。『宋会要』食貨23の9によれば、「応副糴買糧草，從三司印給空頭文鈔，差人管押赴解塩司交割本司，却給付陝西沿辺州軍，召客人入中書填」などの語がある。これは北宋時代、沿辺で糧草を糴買して支給する塩鈔は、すなわち一部分やはり書填しなければならないことが分かった。同時にまた塩鈔に書かれた文字は、多くは印板をもって紙の上に彫印し、そのあるところは書填の必要があるので空白にしたことが想像できる。ただ塩鈔は、偽物をつくられることを避けるために、そのうちの製作と設計は必ずかなり繁雑なものとなるわけである。宋李攸の『宋朝事実』15に記載された益州で製造された交子を考証して、「印紋用屋木人物…，鋪戸押字，各自隱密題号，朱墨間錯，以為私記」云々としている。民間で製造された交子は、すでにこのように繁雑であったので、官造の塩鈔はきつとまた更に精緻となしたであろう。また丘濬の『大学衍義補』27銅楮の幣の条に載せた、金人によって印行された交鈔について、「交鈔之制…，外為闌，作花紋其上，衡書貫例，左書号，右書料，其外篆書曰偽造者斬，衡闌下書中都交鈔庫准尚書戸部文移，及納錢換鈔，納鈔換錢等官司，四囲画龍鶴為飾。」とある。金人の交鈔は、宋人の交子錢引等をまねて製造し、しかも紋理の繁雑さまでもまねているのである。両方を比較してみると、塩鈔はまさにまたよく似ているものがあるところが存在することが想像できる。

この種の想像は、全く根拠がないことではなく、『宋会要』食貨25宣和3年閏5月20日の条に、都省から榷貨務への状に「所用印鈔紙札工墨朱紅

之類、糜費万数」という語がある。⁽²⁾印鈔は、墨と朱紅を使っていることには疑問はなく、これは『宋朝事實』の「朱墨間錯」という語とで互いに証明することが出来る。また『宋会要』食貨28紹熙元年12月23日の条の広東提挙塩事劉世之の奏の中で、「仍将東路鈔引每料只与給降六万籬」という語がある。このいわゆる料は、まさにすなわち『大学衍義補』に記載されている金人の交鈔「右書料」の「料」の字と同義である。いわゆる「料」はすなわち若干数をもって一単位となす意味を指す。また『宋会要』食貨27紹興30年2月24日の権戸部侍郎邵大受の言に、

「秀州塩鈔虧少，支發遲細，遂委平江府都稅務監官買到客人一引塩三袋，係紹興二十七年二十料一字号通州支塩倉支發。」

などの語があるので、塩鈔には年月日が記載されていることが分かる。しかも「料」の字の上にも数字があり、同時にまたある字号などの字句がある。これは金人の交鈔「左書号，右書料」ということと確かに相同じ点がある。支塩の数及び納銭の数に至っては、当然鈔の表面に説明があるべきである。

塩鈔の内容について、われわれは得ることの出来たばらばらな材料を根拠にして、考証して分かったものはわずかにこれしかない。まだ分からなく、しかも確実な証拠のないものはすなわち欠如と付し、敢えて妄行武断をなすことは出来ない。本文は制度の研究に重点を置いていて、塩鈔のものとを詳しくは知らないが、やはり大きな関係はないと思う。

(2) 可参看塩鈔価格工墨銭項下。